

トカゲとムクドリ

修士 2 年 立脇隆文

ある初夏の昼下がり、いつものように正門守衛室に鍵を借りに行くために大学内を歩いていた。よい天気で青い空が広がっており、その中を白い雲がのんびりと空を横切っていく。道端に生えている草々は、刈り取られたためか丈は短い、心なしか普段よりも元気に見える。そんな中、10mほど前方に一羽のムクドリを見つけた。

ムクドリはなにやら地面をつつきながら跳ね回っているようである。何をしているのだろうと思いながら、歩みを進める。5mくらいまで近づいてもムクドリは逃げる気配を見せず、相変わらず跳ね回っていた。そんなとき、ムクドリの足元で何か動いた。それは細長く、青黒い光沢のある体をしている。地面の上をすすると滑るように動いている。「トカゲだ！！」私は思わず息をのんだ。ムクドリはトカゲを、それも十分に成長した大人サイズのトカゲを襲っていたのである。ムクドリは執拗にトカゲをつつき、くわえようとしている。ムクドリがトカゲをくわえると、トカゲは懸命に体をくねらせ、ムクドリのくちばしから滑り落ちる。そして、数十cm先の草むらに逃げ込もうと懸命に走る。しかし、ムクドリはすばやく跳ね上がり、回り込んでトカゲを捕まえる。そしてまた、トカゲは落ちて逃げる。どれくらいの時間であったろう。捕まえる、逃げるを4・5回繰り返した後は、トカゲは徐々に弱っていき、

ついにはぐったりとして、くちばしにつままれるままとになっていた。

またトカゲが落ちた。今度はトカゲが逃げようとしたのではなく、ムクドリがトカゲを落とし、何度もくわえなおすようにしてとどめを刺そうとしている。「トカゲもこれで終わりか…」と思ったそのとき、トカゲは最後の力を振り絞り、縁石を乗り越え草むらに逃げ込んだ。「やった、逃げ切った！！」私は心の中でトカゲの気持ちを察した。ムクドリはトカゲを見失い、あたりを見回している。ついにトカゲはムクドリから逃げ切った。必死の抵抗でムクドリの恐怖から逃れたのだ。

…そう思ったかった。トカゲもそう思ったに違いない。しかし、自然界の現実はその甘くない。トカゲは草むらに逃げ込んだが、ムクドリはそれでもトカゲを見つけ出し捕らえた。ムクドリは何度かくわえなおし、トカゲがもうほとんど動けないことを確認すると、トカゲを放り投げはじめたのである。トカゲは草むらの中で1mほど投げ飛ばされ、またくわえられ、また飛ばされた。私からは徐々に離れていき、植木の下に投げ込まれ見えなくなった。私はどうにか続きを見ようと、少し近寄った。かろうじて見えたトカゲは、もう動いてはいなかった。植木の陰で、ムクドリは首を振っている。くちばしにはもちろんトカゲが挟まれている。トカゲはもう動かないが、何度も地

面に打ち付けられている。ムクドリは満足したように、トカゲを地面の上に置いた。そして再度トカゲをくわえなおすと、少し重そうにしながら飛び去っていった。私はムクドリが飛んでいく姿をただ呆然と見続けるしかなかった。

ムクドリがどこまでトカゲを運んでいったのかは定かではない。おそらく、巢にひながいて、ご馳走として運んでいったのだろう。とても大きな獲物であり、トカゲをしとめたムクドリはさぞ鼻高々であったことであろう。ひなも大喜びだっただろう。一方、トカゲとしては、空からの襲来から懸命に逃げようとしたものの、その願いはかなわなかった。トカゲの大きさから考えるに、もう子供を残せる年齢であつたらう。あのトカゲは子供を残せたのだろうか。トカゲは無念であつたに違いない。

自然界は弱肉強食と言われるが、まさにその現場を見た。しかし、まさかムクドリがトカゲを襲うとは思ってもみなかった。私のムクドリのイメージは、「集団で行動し、サクラなどの果実を食べている鳥」というものだった。それがなんと、爬虫類を襲っていたのだ。ムクドリにとって、果実が少ない場所や季節には、なんでも食べられるものは食べて、生きていこうとしているだけに違いない。それはとても当たり前のことで、ムクドリにとってはまさしく生きることそのものである。

一方、トカゲの立場に立ち、木に集団で止まっているムクドリの数を考えると、ゾッとする。毎年何匹のトカゲが襲われているのだらうと思わずにはいけない。道路などアスファルトは、トカゲにとって体温を上げるのに最適の場所であろう。しかし一方で、隠れる場所が少なく空から見つかりやすいだろうから、この先トカゲがムクドリの恐怖の下で生きていけるのだろうか心配である。トカゲの一日の生活を考えるとさらに大変である。昼間は空からムクドリの大群に見張られ、夜間は安全かと思いきや、タヌキやハクビシンといった哺乳類に襲われる。まったく持って気の休まる時間がない。自然界は実に厳しい。

しかし、今回のようなムクドリとトカゲの関係は、本当に自然界のものなのであろうか。森や草原、河原といった自然環境はもっと立体的で複雑な構造を取っており、トカゲの隠れ場も十分に確保されていたのではないか。それが、道路の敷設や住宅化などによる環境改変によって彼らの生活場所の構造や生活スタイル自体が変化した結果なのではないだろうか。このようなことを考えると、人間の影響がどこまで及んでいるのか想像もつかず、なんだか申し訳ない気持ちになる。こんな環境であつても、こんな環境だからこそ、小さな子トカゲを見つけると「こんなところでよく生まれてきたね。頑張つて生きろよ。」と声をかけたくなる。